イクメンを探して

朝のゴミ出し、保育園の送り迎え、入学式や卒業式や運動会への参加、あそこにもここにも男性の姿。すでに珍しくない風景。でも、仕事は大丈夫なの？ って声をかけたくなるイクジイの僕はオクレテル？

小学生から高校生までの子どもがいる児童福祉施設に勤める臨床心理士のTさん。1年間育児休暇をとって、しばらく主夫業に専念するそうです。職場や両親の反応は…。

N　父親が育休をとって母親が働くことに抵抗はなかったですか?

T　独身時代には想像もしなかったことです。妻も臨床心理士ですが、非正規なので小学校のスクールカウンセラー、大学の相談員として日ごとに別なところに働きに行っています。一年ごとの更新なので、休むと次の更新がないかもしれない不安があります。その点、僕は育休後も職場復帰は可能なので、妻は今まで通り働く方がいいのではないかと。

結婚した当初から話はしていましたけれど、男性は働き続けるというイメージがあったので、受け入れるまでには時間がかかりました。でも互いの仕事の兼ね合いを考えると、僕が育休をとったほうが安心かなと。子どもにとっては早い時期から母親がいないとどうなのかという不安もあるにはありますが。

N　職場の反応はいかがでしたか?

T　男性ではじめての育休取得です。そんな制度があったのとびっくりした先輩もいました。独身の後輩はいいなあと言っていましたね。

長く勤めている職員が多いので年齢層が厚くて、ざっくばらんに話しができるアットホームな職場なんです。会議で遅くなると家から電話がかかってきて、「ご飯つくりに帰らなあかん」と言う男性の先輩がいますし、「洗濯物を干していると、近所の人にどう思われているのか気になるわ」とか、話しますよ。家の都合で休んだり遅れることがあっても融通し合う、働きやすい職場です。こういう環境があったから育休が取れたんだと思います。

N　ご両親はびっくりされたのではないですか。

T　男社会でやってきた人だから戸惑っていました。職場での立場は大丈夫かと。今でも心配しているでしょうね。でも、僕が休みをとっている方が孫の顔を見に来やすいんじゃないかなと思いますよ。

N　はじまったばかりのイクメン生活はいかがですか?

T　育児に専念できるようになると、夜中の授乳なんかで多少寝られなくても大丈夫って思えるので、落ち着きました。育休の前は、施設の子どもたちとのお別れもあるし、子どもの世話も覚えないといけないし、仕事しながらは大変でしたね。

まだ生まれたばかりですからこれからが本番。自分の思うようにできるのか不安はあります。最近ずいぶん夜も寝るようになったし、ゆりかごに入れたら一人で寝るようにもなったし、一人で声を出して遊ぶようになりました。今まで勉強していたことが、こういうことなんだなるほどなぁと思ったりしています。日に日に変化する子どもの様子を間近に見ていられるのは貴重な体験だと思います。

N　今後は?

T　仕事の面から考えると彼女の方が大変な中でやってきているのを見ているので、自分がこのまま専業主夫になるということも含めて、何が一番いいのかはよくよく考えていこうと思っています。

でも、僕は子どもが好きで今の仕事を選んだし、もっと子どもたちのそばで支援したいし、やりがいを感じているので続けていきたいです。ただ、空白があいたことで今までのように仕事ができるだろうか、居場所が残っているだろうかと不安はあります。だれもが安心して育休をとれるようになっていってほしいと思いますね。

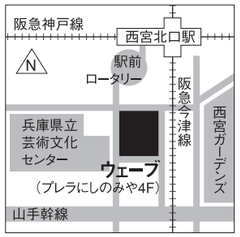
T：イクメンさん／N：編集委員

編集後記　○男と女、いくら埋めても残る溝「エ・アロームー」と言いたいが…（NNNB68）○海外の空港での入国手続きの長い列。ベビーカーを押しながら待つのを覚悟で最後尾に並ぶと、モーセの海割りのように行列が割れた。みんなが優先して通してくれたのだ。感動した。（TANGO）○小倉さんへのインタビューを通して、専業主婦の立場を深く考えることができました。ポイントを絞って分かりやすく伝えることの難しさを痛感…文章って奥深い!（かつみ）○一年半で、自分自身の視野が広がり、あと半年と思うと名ごりおしいです。ここで学んだことをこれから生かしていきたいです。（イブかなこ）○超高齢化、少子化へ世界でもまれに見るスピードで進んでいる日本。社会構造そのものが変化し、女性が家庭をもっても働き続ける社会的ネットワークを早急に構築する必要がある。（内田）

■ネットワーク委員とは：西宮市男女共同参画センター　ウェーブを拠点に市民参画の事業を推進することを目的に公募で選ばれた市民（任期2年）。現在の第6期委員は主に情報誌の編集・発行をしている。■ウェーブ（WAVE）の意味：「男女がともに行動し、活気に満ちた平等社会をめざす」ことを意味する言葉（With/Act/Vitality/Equality）の頭文字と、男女共同参画社会の実現に向けて大きな波（うねり）をつくっていこう、という思いがこめられています。

ウェーブは、男女共同参画社会の実現をめざす施設です。性別、年齢、国籍にかかわらず、ご利用いただけます。
◎開館時間　1月4日～12月28日／9：00～22：00
◎受付時間　月～土曜日（年末年始、休日除く）／9：00～17：15

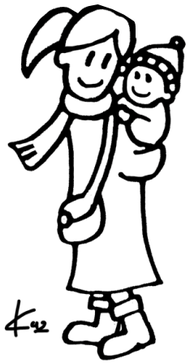
WAVE PRESS Vol.14
●発行日　2012年11月28日
●編集・発行
西宮市男女共同参画センター
ウェーブネットワーク委員会
〒663-8204 西宮市高松町4番8号
プレラにしのみや4階
Tel. 0798-64-9495
Fax. 0798-64-9496
http://www.nishi.or.jp/homepage/wave/



市民がつくる、市民のための、男女共同参画社会をめざす情報誌「ウェーブ プレス」
WAVE PRESS
2012 NOVEMBER Vol. 14

私が専業主婦になった理由

出産はともかく、育児は男性にもできる。でも、人生の転機を迫られるのは女性…。その選択は自分で決めた？ そんなもんだと思ってた？ 今、専業主婦である女性3人で座談会を開きました。



女性が出産・育児で仕事を辞めずに正社員として勤めた場合の生涯賃金は2億3600万円に対し、出産で辞めて非正規で再就職した場合は5100万円というデータをご存知ですか？　※国民生活白書（H9）より

それぞれの理由で今は専業主婦なんですが…

N　私は子どもが2人目までは働いていたんだけど、3人目の妊娠中に体調を崩して遅刻したり、子どもの病気が重なってしまって。転勤してきたばかりの上司に退職を勧められ、辞めざるを得なくなったのよね。

M　私は妊娠したら辞める、という雰囲気の職場でした。

K　私は子育てとの両立ができるとは思えなくて、第一子出産前に辞めてしまいました。

M　私は夫の「僕もそれほど協力できないだろうし、仕事辞めてもらえないかな?」という言葉が決定打だったかも。実家の近くに住んで親に助けてもらうことも考えたし、両親もかなり勧めてくれたんだけど、夫が嫌だと言ってできなかったんです。

育児で父親が仕事を辞めることはほとんどないのに、母親は仕事を辞めるか辞めないかの選択を迫られるんですよ。夫の生き方は私ほどに変わらない。

N　私も妊娠や育児できちんと勤められないときは、自己嫌悪してしまったわ。職場や周りの協力があればちがったかも。

K　私も辞めたから3人産めたけど、仕事を続けていたらたぶん子どもは一人だけだったと思う。

N　仕事をしながらの育児は周りのサポートがないと難しいよね。子どもを保育園に預けはじめたころは、泣かれると身を切られるように辛かった。でもしばらくするとお互いに慣れてきて、迎えに行くと子どもは満面の笑顔。それだけで一日の疲れが吹っ飛んだ。大変だけど充実した時期だった。

どんなことが不満? どんなことが幸せ?

M　収入がないと夫と対等じゃないような気がしない?　好きなものを買うのも夫に遠慮して、家計費を節約したり。夫は対等だって言うけど全然対等じゃないと思う自分がいる。

N　稼ぎはないけど専業主婦だって充分働いていると思うよ。遠慮せず使っていいんじゃないかな。

K　でも実際働いている人の方がお金を自由に使っていそう。働いている友だちが頻繁に旅行するのは羨ましいな。子どもの成長は楽しいけど、それだけが私の人生なのって思うときがある。自分の夢や目標をみつけないと、自分が自分として生きている気がしなくて。

N　仕事していたころは、ご飯もきちんと作れなかったけど、充実していたと思う。今時間はたっぷりあるけど“子どもが帰るのを待ち、寝るのを待ち、夫の帰宅を待つ”。待ってばかりで何かを生産している気がしない。

10年後20年後は働いている?

K　専業主婦がいいとか、働いてる方がえらいとかじゃないと思うし、生きたい人生を後悔せずに生きていけたらと思うからよくわからないなぁ。

N　下の子がもうすぐ小学校だし、そろそろって思います。でも子どもが3人いると立て続けに病気になったり、学校行事がたくさんあったり、やはり周りの人のサポートがなくては仕事はできない。ご近所や行政の力を借りられる体制があれば、いつでも仕事はしたい。あと、実感したことは保育料が高すぎる!

M　したいことはいっぱいあるけど育児に専念するしかないのよね。今の私はやっぱり“仮の姿”かな。

*Mさん「目下の悩みは大好きなピアノを思う存分弾けないこと」
*Kさん「学校行事やボランティア、自分や子どもの習い事で気がつけばスケジュール帳は真っ黒」
*Nさん「一度出かけたら家に帰りたくない!　でも家にこもるのも大好きな籠作家」

産むべきか、働くべきか、それが問題なの?!

女の

国の調査によると、育児休暇を取得する女性は若干増えてはいます。が、継続して働いている割合は減り、出産退職も増加傾向。女性が出産後も継続して働き続けることの難しい社会であることに依然変わりありません。働き続けたい女性ががんばらなくても働き続けられる社会であってほしい。でも、「私が働く」ことだけで"問題"は解決するのでしょうか。

INTERVIEW

小倉千加子（おぐらちかこ）

心理学者
社会現象やメディアに登場する女性像まで幅広く取り上げ、「女らしさ」や「性」についての刷り込みが個人の生きがたさをどのように形作っているのか、分析を続けている。著者に『アイドル時代の神話』（朝日文芸文庫）、『セックス神話解体新書』（ちくま文庫）、『セクシュアリティの心理学』（有斐閣選書）、『「赤毛のアン」の秘密』（岩波書店）など多数。

自尊感情が低くなるのは何故だろう…

「子育ては立派な仕事」とだれもが言うのに、子育てに専念していると社会から取り残されているように感じてしまう。だから、今の私は仮の姿と思うことにする…。「いろんな人が問題を抱えているけれど、その原因はジェンダーであると気づく人は少ない」と言う心理学者の小倉千加子さんにお話をうかがいました。

★男性の自尊感情を支える家族

既婚女性の望む働き方は、今の家庭を維持する時間的なゆとりはほしい。経済的なゆとりもちょっとついてくる。家事ができて、なおかつ、自分を待ってくれている職場がほしい。今の家庭を変えてまで働きたいわけではないんですよね。

家庭が大切という男性は増えています。父親参観日にはどれだけたくさんの父親が来るか。それだけ仕事だけでは満足できない、ということです。すべての人が管理され、マニュアル化され、評価される。個人個人は対立していないが、孤立させられている。職場の疎外性は厳しくなり、心を病む人は多くなっています。その点、子育ては管理されない人間的な営みです。評価されない苦しみはあるけれど、有意義だと感じているのではないでしょうか。会社は信じられない、信じられるのは家族だけ。家族が食べていけるのは俺が働いているからだ。俺が養っているんだ、と。主人が主人足り得るために家族がいるんです。

★子育ては男女平等というけれどリアリティがない

指定されないのに、母親は緊急連絡先に自分の名前を書きます。子どもの権利は自分にあると思っているのでしょう。子どもは第一義的に妻に任せていますという父親は多いですし、子どもにどっちをとるかと聞いたら母親ですね。しかし権利には義務が自動的に付いてきます。

父親は子どもとの心の分離はある程度できていますが、母親はできていない。子どもが褒められたら母親は嬉しい。それだけ没頭しつつもこれだけでいいのだろうかと思う。

子どもは誰のものかというなら、母のものでいいんじゃないですか。せっかく女性が手に入れた権利ですから。明治時代なら、妻が離縁されるとき、子どもは家の跡取りだから置いていけって言われたんです。

★女性だけにある仕事と家庭の二重役割

家制度から近代家族制度に変わり、女性の権利は強くなってきましたが、かつて想像もしなかった義務が登場しました。仕事と家庭の二重役割です。二つのうちの一つを選ぶと、十全に生きていないという気持ちになる。それは専業主婦も働いている女性も同じです。一人の自分がもう一人の自分を否定する。

専業主婦は時間をかけて子どものお弁当を作る、苦痛ではないけれども働きたいと思う。就業主婦は時間という資源がないから、ちゃんとしたお弁当が作れない。こんなに長時間預けていいのか、子どもとのコミュニケーションの時間がとれない、休日には濃厚にお母さんをしてあげないといけない。夫に対する罪悪感はないが、子どもに対する罪悪感に苦しんでいるのです。

二重役割を両立した某出版社の女性は、「仕事も家庭も中途半端でした。生き直すとしたら結婚はしても子どもはつくりません。一つだけ選ぶなら仕事。仕事の方が充実していた」。両立した人も苦しい。完璧な人はいないんです。

「成績がよくてもブサイクやん」「美人だけど頭はよくない」、いずれにしても批判される。他者の批判を内面化し、自分を批判する。働いているいないにかかわらず"女性の病"は、これで説明ができます。苦しめられる罠に女性全員がはめられているんです。

★育児はシャドゥワーク

某有名出版社にいる女性編集者40人、既婚率は高くて20人。子どもがいる人は1人。産休育休中に担当の作家を他の編集者にとられるくらいなら、子どもはいらない。ベストセラーをとって会社の廊下を肩で風を切って歩く感じを失うくらいなら子どもはいらない。子どもというより、ブランクが恐怖なんです。有休とってもいいよ、と言われても、作家さんといろんな話をして夕食を一緒にする生活をなぜ有休でつぶさないといけないのかと。

常に社会的な価値を生産していたい女性はたくさんいます。子どもは生産ですけど、ちがうんです、シャドゥワークですから。

★社会がいう女性の役割とは"専業主婦的な生き方"

専業主婦は働いている女性に対し負けていると感じるけれど、女性は仕事ができても「それだけやん」と言われます。男性と同じような働き方を求められるが、"女性であること"はついて回る。子どもを生んだ時点で、企業にとっては負担でしょうね。女性であることを棄て、子どもを生まず、仕事に邁進して、50歳くらいになってはたと気がつく。会社は決して男女平等ではなかった、私が犠牲にしたものは何だったのかと。

「経済的に自立しなければ」という強迫観念で働き続けている女性にしたら、マンションのベランダで洗濯物を干している女性を見て「どうしたらあそこに昇れるのだろう」「どうしたら仕事を辞めても食べさせてくれる結婚相手をみつけられるのだろう」と思う。ベランダにいる女性は「どうしたらベランダから飛び出せるのだろう」と。自分の芝は青いという演技はするでしょうが、どちらも隣の芝が青いと感じているのです。

☆　☆

「赤毛のアン」の秘密　小倉千加子著／2004／岩波書店

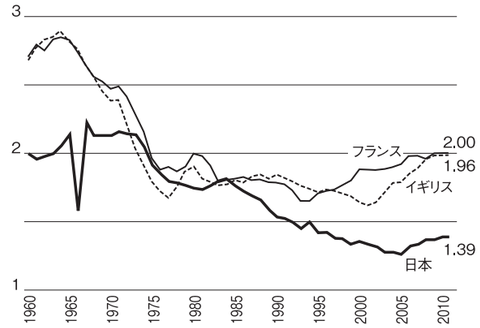
『赤毛のアン』の作者 L.M. モンゴメリが、晩年は神経を病んで自殺したという説を著者は支持している。

子どものころは周りから浮きがちだったアンが、やがてみんなに好かれる美しい良妻賢母となり、家庭を守り、夫や子どもをサポートするようになる。自由奔放な少女の物語に見えるが、実は根底にある価値観は保守的であり、戦後日本の女性に大きな影響を与えた。

モンゴメリ自身は、"人並み"に結婚して"ちゃんとした主婦"になることが大切というプレッシャーに抵抗できなかった。このモンゴメリの心のあり様を理解する意味でも、面白い本である。

※ウェーブで閲覧、貸し出しできます。

フランスの女性は選択を迫られない――
多様な家族形態を認め、女性の社会進出を支えたことにより回復した出生率



フランスの女性は仕事か出産かを悩まない。出産費用は無料。無痛分娩も保険適用。産休を最大16週間とっても出世に響くことはなく、その間の給与は全額保証される。所得制限なしですべての子どもに児童手当が支給される。自宅で子どもをみてくれる人を雇う費用の補助もある。子どもは2歳8ヵ月になると無料の保育所に行き、高校までの学費も無料。また、子どもが多いほど有利になる所得税や9年間に3人の子どもを養育した男女の年金額は10%加算される特典さえある。

1999年に制定されたパクス法*がフランスの結婚の形を自由にした。未婚の母や婚外子に対しても待遇の差はほとんどないため、婚姻カップルと同等の権利を保証されたカップルは増え続け、2008年には婚外子は52.6%と過半数に達し話題になった。1980年代後半から1.6前後を推移していた出生率は2010年2にまで上がった。

また、イギリスでも同じく1.6で推移していた出生率は2010年1.96に回復した。子育てしながら仕事との両立を目指す女性のために国をあげてフレックス制度（柔軟な勤務形態）を導入した結果、景気回復による個人所得が増加し、出産する女性が増えた。

翻って日本では、出産しても諸外国のような支援はなく、就労女性の6割強が仕事を辞めている。職場で築いてきたキャリアや知識はばたりと切れてしまうため、たくさんのものを諦めざるを得ない。その後、再就職しようにも正規雇用はまず望めない。一方、仕事を続ける決断をした女性にも長時間勤務と家事と子育てが重くのしかかる。その上、保育所の高額な費用や長時間保育による子どもへの負担。過酷な生活が待っている。出産か仕事か、あるいは時間に追われる生活か。日本の出生率は2012年1.39。低迷するその数字に女性の思いが表れている。

※パクス法（PACS ／ Pacte Civil de Solidarité）：異性あるいは同性のカップルに対し、法的婚姻カップルと同等の権利を認める。新しい家族組織を国家として容認する制度。欧州各国に広まりつつある。
※参考：「子育てライフスタイル／ All about」「働く女性が子育てしやすい国フランス／石田真代著」「少子化対策のヒントー出産大国フランス／ Newsweek japan」「内閣府男女共同参画局」